

モザンビークとニカラグアーカラシニコフがつなぐもの

キリマネの町を歩いていると、道行く兵隊が AK-47(カラシニコフ自動小銃)を担いでいるのに気がついた。このソビエト連邦製の自動小銃は第二次世界大戦後、革命や独立の象徴として東側諸国を代表する兵器であった。「世界で最も多く使われた軍用銃」あるいは「史上最悪の大量殺戮兵器」などともいわれる。かつて仕事をしたニカラグアでも、兵隊や警察が担いでいるのをよく見かけた。首都マナグア市内のポリバル通り沿いに「兵士の像」といわれる銅像がそびえている。一人の男が空を見上げ、左手に AK-47 を高々と掲げ、右手にツルハシを腰のあたりに握りしめている。ニカラグアでは、AK-47 が革命のシンボルとされている。

モザンビークの国旗をよく見ると、紋章の中に「星」、農業と農民を表す「鋤」、教育を示す「本」と独立への苦闘を示す「AK-47」が描かれている。距離を隔ててアフリカのモザンビークと中米のニカラグア、両国では第



二次世界大戦後も革命戦争や内戦、紛争が繰り返された。キリマネの街角、モザンビーク英雄記念広場に翻る国旗を眺めながら、革命や苦闘を示すシンボルでつながりがあるのかと、しばし感慨にふけた。
(高橋貞雄)

“オールディーアイ通信 No. 105/2020”から

写真:モザンビーク英雄記念広場に翻る国旗(右)
ザンベジア州・キリマネ 2019年

生産者がつくるチョコレート

カカオのバリューチェーン構築を目的とした調査団の一員として、ニカラグアのカカオ生産者マリアさんの農園を訪れた。非常に快活で世話好きな女性で、仲間を集めてチョコレートを作り、イベント等で販売している。

カカオの畑を見て廻った後、彼女が作ったチョコレートを試食させてもらった。すると、調査団の一員であるショコラティエが、「僕があなたのカカオ豆を使って、チョコレートを作ってみましょうか？」と提案した。「いつもの工房とは全く違う環境、設備だから、うまくいかなあ」といいながら、焙煎のコツや磨砕のポイントを伝授していた。彼女は、その技を習得しようと熱心にメモを取りながら、パティシエの手許を見つめていた。出来上がったチョコレートを口にして、「材料は、同じカカオ豆と砂糖のみ。でも作り方を変えただけで、こんなに違うものができるのね」と感銘を受けていた。生産者に初めて会った若いショコラティエと、初めてプロに教わった



生産者、どちらにとっても貴重な経験となったのではなかろうか。(宮内崇博)

“オールディーアイ通信 No. 106/2020”から

写真:クラフトチョコレート会社のショコラティエと共にカカオ生産者を訪問
ニカラグア 2019年

インドネシアのラグビー

2019年、ラグビーワールドカップが初めて日本で開催され、大いに盛り上がった。一方、インドネシアでは、日本の流通経済大学が、2018年から JICA 海外協力隊事業の大学連携プログラムを通じてラグビー普及支援活動を行っている。同大学ラグビー部は、2013年、2014年に関東大学リーグ戦一部優勝などの実績をもつ強豪。ラグビーというスポーツの存在すら知る人が少ないインドネシアで、まずはその認知度を高めるため各地の学校を巡回し子供たちを中心にラグビーの楽しさを教え、同時に選手たちの技術力の向上、コーチやレフリーの育成、スポーツコンディショニングの教育等、ラグビーをインドネシアに根付かせるための包括的な協力を注いでいる。同時に、海外協力隊隊員として活動した同大学の学生が国際協力の面白さを実感し、将来の国際協力人材を目指す例も出てきている。



現在、インドネシアの世界ランキングは 105 カ国中 100 位。インドネシアチームがワールドカップに出場するための道のりは遠いが、同大学の協力がその礎となるのではという期待を持てる優れた支援となっている。(矢野史俊)

“オールディーアイ通信 No. 107/2020”から

写真: ナショナルチームのコーチとして選手に指導する隊員

ジャカルタ市内の総合競技場内のラグビー場にて 2019年6月

ところ変われば出で湯も変わる

エクアドルの首都キトから車で約3時間、火山の麓の標高約1800メートルの地にあるバーニョス・デ・アグア・サンタは、数々の見事な滝と温泉の湧出で有名な観光の町である。周囲の山のあちこちから滝が豪快に流れ落ち、その水はアマゾンへと下っていく。アンデスの山々と濃い緑と滝を眺めながら湯あみのできる施設もある。温泉大好き日本人として一回は行っておきたいと、休暇を利用して行ってきた。日本の温泉地のような自然の地形を活かした雰囲気のある場所や、当然のことながら裸で入る湯は皆無で、温泉プールと呼ばれていた。



看板には、疲労回復のほか、関節炎、打撲、肝臓・腎臓・消化器系などの疾患に効能があるとされていた。高齢者が利用するプールは、底が細かい砂利になっていて所々で湯が湧いていたが、湯加減はぬるく、湧き出るところに自然と人が集まって、その様子は真剣に療養にきているように見えた。隣の浅いプールでは若者、子どもたちが騒がしく遊んでいた。景観は素晴らしく、露天の温泉プールだが、期待し過ぎの私にとっては「コレジャナイ感」が満載の出で湯だった。湯舟に浸かり静かに身を休めるというよりは、家族や仲間と賑やかに明るく楽しむエクアドル式を体験した。(末光 健志)

オールディーアイ通信 No. 108/2020”から

写真: 老若男女問わず楽しめる温泉プール

エクアドル・トゥングラワ県 2015年

キリマネの新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルスの感染拡大が世界的になって以来、モザンビーク北部ザンベジア州での稲作生産性向上の技術協力は、日本との間でリモート(遠隔)対応で実施している。カウンターパート(相手国の技術者や行政官)とプロジェクトが雇用している人たちがオンライン会合や報告書で知らせてくれる、州都キリマネのコロナ禍の下での暮らしの一端を紹介する。

2月頃に政府とメディアによる感染症とその対応策の広報が始まり、3月に首都に初の感染者が出てその後、地方に感染が拡大した。4月に緊急事態宣言が為され、生活と仕事のやり方が一変した。マスク着用や人との距離を保つことが厳しく言われ、スーパーなどの入り口には、手洗い用バケツと消毒用アルコールが置かれるようになった。商店の営業は5時までには制限される。感染防止策を実行させるため警官が街頭をパトロールしている。こうした決まりの徹底は容易ではなく、銀行、病院などでは社会的距離は例外的に守らなくともよく、公共施設での文書や免許の申請、更新等の場では、距離は守られず込み合っている。二人乗りの自転車タクシーは、禁じられても従わずに営業している。守りたくとも守れないことはある。(大竹雅洋)

“アールディーアイ通信 No. 109/2020”から



写真: 感染予防のための広報活動

撮影: Paula Paulo Abreu Latibo キリマネ市 2020年

キリマネの新型コロナウイルス感染症 その2

モザンビークのザンベジア州で実施中の技術協力プロジェクトは、リモート(遠隔)対応を継続している。カウンターパートの人たちがコロナ禍の下での業務進捗状況を知らせてくれる。

州農業局の職場では保健省のガイドラインに沿って感染予防をしなくてはならない。実際には、コンピュータを共有し、手洗い場は不足していて順守は難しい。農村部の作業現場に出るときも、車1台に5人乗りをするので感染リスクが高い。職員をセクションごとのグループに分けて、ローテーションを組んで出勤している。マスクが十分にはないのか、送られてくる写真から、業務中に付けるマスクに農業資材店で手に入る農薬散布のものも使われているようである。

キリマネ市にはマラウイや南アフリカとの貿易に従事している人も多くいるが、国境が閉鎖されて仕事と生活が厳しくなった。住民にとっては、一時高騰した輸入米の価格が気になる。

モザンビークの日本国大使館情報(20年12月18日付)から、9月下旬から1カ月ごとの感染者の増加数を計算した。10月下旬まで全国で4,297名、ザンベジア州で393名、11月下旬まで全国で3,550名、ザンベジア州で162名、12月下旬まで全国で2,147名、ザンベジア州で165名であり、新規感染者数が減少傾向にある。(大竹 雅洋)

アールディーアイ通信 No. 110/2020”から



写真: 農家を訪ねて聞き取り調査

撮影: Margarida Acissa Abdul Jose Salvador ザンベジア州 2020年